
「文献学と解釈学の間」の〈橋〉としての編集文献学

——学術用語の翻訳をめぐって——

明星聖子

〈埼玉大学〉

以下の日本語原稿は、オリジナルの原稿である英語版の概要です。論じている内容が、異言語、異文化の〈間〉での概念了解の齟齬を扱うものであるため、あえて完全に日本語に訳さず、多くの専門用語も原語のままで挙げています。英語版での理解を前提にした補足的な文章であることを、あらかじめおことわりしておきます。

今回の会議に大変光栄にもご招待いただいた際に、私がまず非常に悩んだ点は、英語あるいは日本語のどちらの言語で発表すればいいのかということでした。言語の選択の問題は、この会議テーマ、すなわち「文献学と解釈学の間」について論じるにあたって、きわめて重要なことに思えました。なぜなら、日本語の「文献学」という言葉には、明らかに複雑な意味の混乱があるからです。

「文献学」という言葉は、日本文学専門の研究者の大半においては、英語における Textual Criticism とほぼ同様の理解で用いられています。また、一部の人は、それを Bibliography と同義とも考えています。

主にドイツ文学専門の研究者にとっては（私自身、そこに属するのですが）、この言葉の意味は、実質的にそれらとかなりかけ離れています。例えば、『ドイツ・ゲルマン文献学小事典』という近年日本で出版された本には、「Althochdeutsch(古高ドイツ語)」「Mittelhochdeutsch(中高ドイツ語)」「Märchen(童話)」「Volkskunde(民俗学)」といった見出し語が並んでいるのですが、そこからうかがえるのは、「文献学」という語は、言語学も含む広い意味のものだということです。

そもそも、「文献学」という日本語は、英語由来というよりも、ドイツ語の Philologie の訳語として広まりました。日本のたいていの国語辞書には、「文献学」という項目の説明に、語源として「〈ドイツ〉Philologie」が挙げられています。

そして、ドイツ語の原語の意味としては、先の小辞典が示しているものがほぼ正確だろうと思います。実際、私が1990年代に留学したミュンヘン大学の学部名は、Institut für Deutsche Philologie（ドイツ文献学部）、そして、その下の学科名として、Germanitische Linguistik（ゲルマン言語学）、Germanistische Mediävistik（ゲルマン中世学）、Neuere Deutsche Literatur（近代ドイツ文学）等がありました。

ここで確認したいのは、「文献学」という語の意味そのものよりも、その意味の理解のされ方の違いです。日常的な実感として、私には、日本文学研究者と西洋文学の研究者では、それぞれのコミュニティ内部の言説におけるその語の使用法に、大きなずれがあるように思えます。ごく雑ないい方をすれば、前者は、「文献学」を文学研究の内部の編集をめぐり方法論のように〈小さく〉理解し、後者は、それを言語学から文学研究まで包含するきわめて〈大きな〉概念と捉えているように思えるのです。であるなら、日本語で「文献学」について語るには、どちらの〈了解〉の場にいるのか、それをまず考慮する必要があるでしょう。ところが、その点でいえば、今日のこの場は、その判断がとてむずかしい場といえます。なぜなら、ここは明らかに、〈横断的〉、〈学際的〉な場であり、かつ〈国際的〉な場だからです。「文献学」という日本語は、この場の日本語を母語とする聴衆の耳に、いったいどちらの意味に響くのか。この判断に苦慮した結果、発表

言語として、英語を選択しました。

しかし、こうして英語で話していて、私は、また別の種類の迷宮に入り込んでしまっているような気がしています。というのも、はたして、英単語の *philology* は、私になじんでいるドイツ語の単語の *Philologie* と同じ意味なのか、そこに確信がもてないからです。

じつは、英語で *textual scholarship* と呼ばれる分野、私がかこしばらくずっとたずさわってきている分野では、近年この種の問題理解の相違が大きな問題となっています。たとえば、ハンス・ヴァルター・ガーブラーは、英語の *critical edition* とドイツ語の *Kritische Ausgabe* では、そもそも指している対象の実質が大きくずれていることを明確に指摘しています。これは、明らかに、*scholarly editing* に関するドイツの方法論的伝統と英語圏の方法論的伝統との相違に起因しています。字面上はほぼ同じに見える言葉が、実態としてかなり異なる内容を指してしまっているのです。

昨今のインターネットの広範な普及によって、世界各地の人文科学研究の現場では、研究基盤の仕様に関する国際標準化議論が急速に活発化してきています。そして、その議論のなかでは、この種の文化的理解のずれは、世界中の *textual scholar* の深刻な課題となっています。ところが、残念なことに、日本では、まだこうした *textual studies* や *scholarly editing* をめぐる本格的な議論が始まっていません。

この点を憂慮して、今年（2010年）の3月、私は、クリスティアン・ウィッテルン（京都大学）と共に、自分の勤める埼玉大学で、おそらく日本で初の *textual scholarship* を冠する国際会議を開催いたしました。幸いにも、その会には、3名の招待講演者（うち1名は事情により Paper 送付のみ）以外に、海外7カ国からこの分野の代表的な研究者約20名が参加し、期待以上にたくさんの議論が交わされました。このこと自体は、とてもうれしかったのですが、しかし、かようにさまざまな（国名だけでも8つに及ぶ）文化圏からの参加者を迎えた会議の運営にあたりながら、私は、まさしく上記の異文化ギャップにどんどん深く悩んでいたのです。

一例を挙げれば、基調講演者のひとりであるボード・プラハタは、ドイツ語の原稿のなかで、*Editionswissenschaft* というドイツ語単語を、彼の専門分野を指す言葉として頻繁に使っていました。しかし、それをどう英語に訳せばいいのか？

すでにこの発表をお聞きの方はお気づきのとおり、英語圏では、対応する当該分野は *textual scholarship*, *textual studies*, *scholarly editing* と主に三種類の用語で呼ばれています。では、このどれが、いったいドイツ語でいう *Editionswissenschaft* にあたるのか？ いや、それ以前に、そもそも、これら3つの英語表現の相違はどこにあるのか。

さまざまな文献にあたりながら、議論を重ねた結果、結局導いた結論は、どうやら英語圏の研究者たちは、これらの3つの用語をかなり曖昧に、ほぼ同義として使っているらしいということでした。そして、学問領域を指す用語として、*Editionswissenschaft* というドイツ語用語に対応するのは、英語では *textual scholarship* が一番適切だろうと判断しました。（ちなみに、ここに挙げた英語の用語、ドイツ語の用語ともに、どれもおおそ1980年代から頻繁に使われるようになった比較的新しい言葉です。したがって、それらの言葉が指す国際的な学術領域の成立は、ごく最近のことといえます。なお、ドイツ語の内部でも、英語のような類語群はあり、*Textkritik*, *Textologie*, *Editionsphilologie* といった言葉がそれにあたります。）

3月のその会議の際には、いま問題にしている事柄に関連して、さらにひとつ重要なことを学びました。もう一人の基調講演者であるベルギーの研究者ディルク・ファン・ヒュレの英語の講演を聞いたときのことで

ファン・ヒュレは、その講演を、「ヨーロッパでは、1970年代、80年代に、大学の学部名や学科名から、*philology* という言葉が相次いで消えてしまった」という内容の言葉から始めました。そして、その背景には、

philological scholarship と literary criticism の〈階層〉に関する暗黙の了解があると指摘したのです。その〈階層〉をめぐる了解とは、彼自身の発言によれば、philological scholarship は、the interpretation of the text の「前段階」にあると見なされている、いいかえれば、前者は後者のいわば〈下に〉あると見なされている点でした。

ファン・ヒュレの講演のタイトルは、“Textual Scholarship and Genetic Criticism: a rapprochement”です。そのタイトルが直接的に示すように、その主な主張は、これまで textual scholarship と genetic criticism は別物と考えられてきたが、それらが rapprochement = 和解することで、文学研究に豊かな成果がもたらされるというものです。ダーウィンの『種の起源』を例に使ったこの講演は、非常に明解で説得的なものだったのですが、ただひとつ私に気になったのは、そもそものそのテーマの前提でした。つまり、先に挙げた philology と literary criticism の階層をめぐる了解についてです。私の理解では、その関係は逆でした。しかし、ここを考え始めてすぐに気づいたのは、もしかしたら、英語の philology は、ドイツ語の Philologie と別のものを意味しているのではないか、ということです。彼と私の理解が異なっているのではなく、もしかしたら、英語の philology とドイツ語の Philologie がそもそも別の内容をもつ言葉なのではないか。

そう悩んで思い返してみたのですが、しかし、私が知っているかぎり、英語圏の研究者もまた、philology をドイツ語の Philologie とほぼ同様に用いていました。例えば、エドワード・W・サイードは、彼の遺作 *Humanism and Democratic Criticism* のなかの“The Return to Philology”と題した章で、“Philology is, literally, the love of words,”と始まる文章を書いています。彼がそこで使っている philology という言葉の意味は、前にふれたドイツ語圏での理解とほぼ変わらず、全体をむしろ言語学に近いところに位置づけている〈大きな〉ものです。また、彼は、そのテキストで、hermeneutics という言葉も使っているのですが、その使用の仕方も、ドイツ語でのそれに近いものでした。つまり、その語を、philology の一部、いわば philology の内部の一方論であるかのように語っているのです。

正直なことをいえば、今回の会議テーマの英語名を知ったとき、私は3月に感じた当惑から抜け出す鍵を見つけたように感じました。というのも“Between Philology and Hermeneutics”というタイトルには、ファン・ヒュレが彼の講演で示したものと同じ前提がうかがえるからです。つまり、現状における編集と解釈の〈分離〉という了解の前提です。そして、さらに推測できるのは、英語の話者間にも、philology という語に関して、日本と同様コミュニティごとの了解の違いが、存在しているらしいということです。だが、ここまで考えて、私ははたと立ち止まりました。いや、その推測は、本当に〈正しい〉のか？

というのも、よくよく考えてみれば、ファン・ヒュレは、英語圏の研究者というわけではなく、ベルギーの研究者であり、所属する学術コミュニティは、textual scholarship のそれであると同時に、genetic criticism というフランス語圏ディシプリンのそれです。そして、今回の会議の発表者の大半も、同じく英語でいう genetic critic の方々と理解しています。とすれば、より〈正しい〉推測は、以下のものではないか。すなわち、philology を hermeneutics と〈分離〉させる見方は、もしかしたらフランス語圏の genetic critic たちの了解ではないか。しかし、そうなるともはや私にはお手上げです。ドイツ文学研究者として、ドイツ語圏と英語圏の用語の差異に足下をすくわれながら、それでもなんとかこうして英語で話そうとしているのに、その上、英語圏とドイツ語とフランス語圏の相互の定義の違いまで検討しなければならぬのですから……。

かくして、この種の translingual で transcultural なコミュニケーションというのは、とてつもなく困難だといえます。しかし、いかに途方もなく困難だからといって、そこで相互理解の試みを諦めてしまってはならないでしょう。情報技術の発展は、これからも急速な勢いで世界を狭め、人文学の分野においても、国際化、学際化を一気に促していくと予想されます。このような情勢下では、今後も〈壁〉を越える努力、誠実な〈対話〉を实らせる努力が続けられるべきでしょう。そして、たとえどんなに困難であろうとも、これ以上の対

立や分裂を避け、さまざまな意味における〈和解〉を実現していくべきだと考えます。

僭越ながら、私も自分の本来の研究領域であるカフカ研究を通して、この〈和解〉、別の言葉でいえば、〈橋〉をかけることを目指してきました。その研究の方法論とは、まさに編集と解釈の融合、すなわち、カフカの未完結の手書き原稿を分析しながら、その編集のあり方を探ると同時に、その議論から逆にカフカの〈書きもの〉の本質をあぶりだすというものです。そして、そのような編集に関わる問題、別の言葉でいえば Textkritik というオリジナル言語に密着した探求に関わる問題を、できるかぎりわかりやすく日本語で語ろうと、これまで自分なりに努力を重ねてきました。

この機に加えていえば、その研究に着手した最初の頃、1990年代のドイツ留学中に会ったのが、Editionsphilologie という学術領域でした。本発表の日本語タイトルにある「編集文献学」という言葉は、当時最先端であったその領域での議論を日本語の文章に取り入れる際、直訳的に編み出したものです。この Editionsphilologie は、現在のドイツ語では Editions-wissenschaft という語にほぼ置き換えられていますが、それら2つの語の意味は、実質まったく変わらないといっていいいでしょう。そしてその Editions-wissenschaft が、繰り返せば、英語の textual scholarship に相当します。そして、それらもほとんど同義です。

(さらに付言すると、昨年2009年、大久保譲、神崎正英とともに、欧米のその新しい領域の議論を日本に導入するべく、アメリカの代表的研究者であるピーター・シリングスバークの著書を翻訳し、『グーテンベルクからグーグルへ——文学テキストのデジタル化と編集文献学』というタイトルで出版しました。「編集文献学」という訳語の選択に関しては、その訳書の「あとがき」でも、ここは若干異なる観点で詳しく述べてあります。)

ファン・ヒュレの指摘にもあったとおり、現在ヨーロッパの大学の学部名や組織名から philology という語はすっかり「消えてしまった」という感があります。前にふれたミュンヘン大学の学部についても、その名称は、近年、Fakultät für Sprach- und Literaturwissenschaften に変わってしまいました。このような変化の背景には、ファン・ヒュレが挙げる〈階層〉のほかに、おそらくは philology という言葉が言外にもつある種の歴史的なネガティブなイメージも関係しているのでしょうか。それはそれで、この語の理解に関し重要な側面であると思うのですが、本日はそこに踏み込むのは控えます。

いずれにせよ、philology はヨーロッパでは消えてしまったように見えるにもかかわらず、サイドの先のエッセイにもあるように、英語圏の研究者たちからは、回帰が望まれている学問でもあります。ポール・ド・マンも、まさしく同じ The Return to Philology というタイトルのエッセイを書いていることを付け加えておくべきでしょう。彼らの言説を見るに、もしかしたら、philology は、いわば最後の〈希望〉といえるのかもしれませんが。そして、そうだとしたら、事実上その後継者である textual scholarship もまた〈希望〉になりうるといえるでしょう。

「文献学と解釈学の間」というこの会議タイトルが、言外に意図しているのも、おそらく、「と」という言葉がつなぐ2つの領域の〈和解〉でしょう。であるなら、きっとその〈和解〉とは、私が目指してきた〈橋〉と同種のもので。英語でいう textual scholarship、ドイツ語でいう Editions-wissenschaft、そして日本語でいうところの「編集文献学」に、私はだから、これからの〈希望〉を託したいと思っています。